

## 日本の学校を訪問して

台北市政府教育局国民教育科研究員 簡 馨澄

一月の終わり、台北市呉興小学校の校長先生たち24名の参加者で、日本の池田小、卯の里小と緒川小を見学する機会を得、充実した研修ができました。

日本における1週間の旅で、私(簡)と葛二人、加藤幸次先生のお陰で三日間、池田小を(実は無理なお願いでしたが)見学させていただきました。校長先生と先生方にはご多用中にも関わらず、時間をあけて、私たち二人におもてなしと種々な事を教えてくださいましたこと、この会誌を通じて、もう一度心より感謝申し上げます。

今回の研修を通じて、日本での学校経営の枠について、今まで読んだ情報とやっと結び合い分かるようになりました。また、先生方との討論会は大変興味深く勉強になりました。特に、教育観と子ども観など、心構えの部分について、国が違っても共感できる場所もあり大変嬉しく思いました。この訪問は私たちにとって、とても有意義でエキサイティングでした。研修期間が短いので間違いもあるかもしれませんが、池田小の教育について次のような感想を持ちました。

1. 教育は人間味あふれた豊かな環境の中で、子どもたちの学習を単なる教科にとどまらず、生活活動に発展させ、人と人との接触を通しながら、自己形成、自分を創っていくものというのが池田小の考え方です。そのために、学校は子どもたちに開かれ、子どもの生活の場、学習の場となっています。例えば、給食は異学年交流で行い、1テーブルに1ファミリーの形で食べる仕組みになっています。高学年の子どもは低学年の子どもに礼儀作法や片付けの仕方を教えているのも、こうした考えに基づくものです。
2. 年間学習計画があり、単元名と時間数が詳

しく書かれています。総合的なカリキュラムも含まれていました。高齢化、国際化、情報化の時代に合ったカリキュラムもかんがえられました。例えば国際化を意図した学習では、私たちの訪問も体験的な学習になります。

私たちの訪問時の授業はこのようなものでした。まずお互いに白紙に名前を書きます。そこで、私たち双方が大きな発見をしました。それは、「秀足」は台湾では女性の名前に使われ、日本では男性の名前に使われるということです。「順令」はその逆です。同じ肌色なのに、違う言葉を使っています。子どもたちにとっても、私たちにとっても、生きた体験学習になったというわけです。

3. 動物に餌を与える飼育当番もありました。こうした活動は、人間と人間、人間と動物の間に温かい心情や関係を創る活動として有意義です。

4. 台湾と日本の学校教育は、さっと見ると似ているようですが、内容は違うようです。例えば、毎朝の朝会、お昼の給食、児童自治会とクラブ活動(台湾では団体活動という)などの日常行事は台湾でも実施していますが、やはり学級規模とか教育の考え方の要因などで、同じ事なのに違う雰囲気を感じました。

短期間の訪問でしたが、校長先生を始め、先生方の努力によって、学校の創立時の教育のコンセプトを守りながら、地域の要請と児童の実態に合わせて、21世紀の夢に向かって居留守型は、強く印象に残りました。

帰国してから、頂いた各校の研究紀要とカリキュラムをもう一度読みました。これからも台湾の先生たちと、もっと頑張らなければならないと思っています。

## 個性化研究発表会報告

今年度も秋から冬にかけて、全国各地のオープンスクールで個性化教育研究発表会が実施されました。その中から事務局員たちが参加したいくつかを報告します。少しでも会場の熱気が会員のみなさまに伝われば幸いです。

### 愛知県緒川小学校

1月23日(金)

緒川小学校は、オープンスペースをもった学校に生まれ変わって今年で20年だそうです。

緒川小学校の実践を自校の実践の参考にしてきた学校も多いことでしょう。こうしたオープンスクールの大ベテランの研究発表会に、全国各地から大変多くの方々が参加し、朝早くから夕方まで熱心に参観していました。

公開授業は、横断的学習・総合学習・生活に全学年が取り組んでいました。お年寄りと一緒に遊び道具作りをしていた1年生。劇作りをしていた2年生。ロボット作りの3年生。東浦町を世界の人々に知らせる学習の4年生。アニメーション作りの5年生。自分の生き方について



考え卒業に向けて活動していた6年生。人形劇作りのおおとり学級。どれもそれぞれの活動の中に、子どもたちが自然といろいろな学びができるような(人的・物的)学習環境が整えられていました。特に人的環境としてゲストティーチャーやボランティアなど地域の人材活用が充実していることは、緒川小学校の長年の研究実践の成果の一つだと思いました。

オープントイムでは、参観者の質問に自分の思いを熱っぽく語る子もいました。「この時間が好きなのだなあ」と感じさせられるひととき

でした。



午後は分科会および無藤先生の講演が行われ、質問も多く出され熱のこもった話し合いが繰り広げられました。

総合学習などへの関心の高まりを感じた研究発表会でした。

(五十子晴美)

### 山北町立三保小学校

1月26日(月)

前から一度行って見たいと思っていた学校であった。今回研究発表会に参加できたことは大変幸せであり勉強にもなった。三保小学校は、丹沢湖の迫り出した半島の上であり、三方を湖に囲まれた大変ながめのよい場所にあった。当日は、天気もよく富士山が1日中きれいに見えていた。草加のように平地で住宅や1場に囲まれた所から行くとその環境のよさにうらやましかった。

研究発表会で展開されていた総合学習も、このめぐまれた環境を利用したすばらしいものであった。研究も小規模校という特色から「個」を中心に、一人一人の個性や学力を多面的にとらえ、個が生きるための手立てを重点として進められていた。そのため、三保タイム(はげみ学習)も、個人プログラムができており、まさに「個が生きる学習活動」になっていた。この学校の考え方は、すこし長くなるが紀要の文章を使うと次のようになる。「子どもが主体的に学習するということは、自分の願いや思いに基づいた学習をするということである。いつ何をどのように追求するのか、その学習に関わる重要な意思決定の主体は子どもたちである。たとえ無駄や遠回りに見えても、子どもたちなりの道筋がある。大切なのは効率的展開や結果的な成功ではなく、追求過程における子どもたちの

意欲や経験と深まりである。従って、教師の子どもへの関わりは、その子どもがより納得のいく自己決定をするための支援であり、学習全体を見通した教材観をもっていることである。」この学校で展開されている教育は、子どもの願い・思いを最大限に保障するものであった。

少し遠かったが、充実した1日を過ごさせていただいた三保小学校の先生方に感謝しながら帰途についた。

(多田信夫)

## 千葉県立打瀬小学校

2月6日(金)

まさしくバリアフリーな学習環境のもと、1600余名の参観者にうずもれながらも、それぞれ自分の課題に取り組んでいた子どもたちの明るくのびやかな表情が印象的だった。

オープンな廊下・広い階段・使いやすい壁面やボード・いろいろ端のように段差のある小スペース・ありとあらゆる部分が、子どもたちにとっては学習・生活の一部になっていた。普段加藤先生が言われている、「直接学習環境と向かわせていく」点において、日頃の打瀬小の先生方のこだわりと積み重ね、そして何よりも新しいことへの開拓精神の熱気が伝わってきた。

そんな人々の輪の中から、異国の言葉が聞こえてきた。バリアフリーの考えのもと、6年生の質問に熱心に答えていた、外国人・生活経験者の真摯な姿に参観者もつい参観を忘れて、一緒に学習に参加していたようだった。情報の羅列ではなく、体温を感じ取りながら子どもたちは、何かを発見したであろう。

自分なりのやり方に自信を持って、コツコツと楽しそうに「あそび」や「物語」を作っていた1・2年生、総合学習を、単に社会や理科の発展として設定するのではなく、地域に目を向けさせる3年生(ディスカバー千葉)→4年生(わたしのすむNIPPON)→5年生(私たちの地球を救う61+2の方法)と学年が進むに従ってより大きい活動になれるように工夫してあった打瀬プラン。

「総合学習は全体を見直し、カリキュラム全体を子どもにそって編成し直す、総合カリキュラムの考え方で」という高浦先生の話があった。

うさぎを飼うことによって、自分はどうしたいのか、どうしていくのか。子どもたちの発想を伸ばし、追求を深めさせることに、子どもと

ともに楽しく取り組んでいる打瀬小のスタッフは、今、夢・未来を創っている。

(加藤久美子)

## 個性化教育の総仕上げ 防府市中関小入江彰治校長の戦い

全個教連副会長 永地正直

平成9年11月12日、防府市立中関(なかのせき)小学校では市指定の生涯学習推進研究発表会が開かれていた。平日の午後、1時半から受付が始まり4時半には閉会という地味な発表会である。

しかし、この発表会は入江彰治校長にとっては30数年間の入江流個性化教育の総仕上げ、総決算であった。

入江氏が中関小学校長に就任して学校を変えようとしたのは5年前である。学校がひどい状態であることは就任してすぐに分かった。中関地区は元は塩田の広がるのどかな地帯だったが、その跡地に工場や自衛隊が進出して、学校は30学級の大規模校になった。

校舎は従来型、継ぎ足して拡張した後が歴然と見える。急膨張の人口にやっと対応した学校であった。しかも30の学級はそれぞれ独立国家のように振る舞っている。一体感などどこにもない。そんな学校をどうしたら「子どものための学校」に改造できるだろうか。

入江校長の戦いが始まった。それは当然30年の経験を総動員して、考え、また考える日々である。1年目はほとんど無為に過ぎてしまった。残り時間は少ない。あせりの中で反芻したのは初任以来の体育授業で考えた「個を大事にする授業とはなにか」ということだった。鉄棒一つとってみても逆上がりはできないが、水泳は得意という子がいる。その子にむりやり逆上りをやらせることでいったい何が残るのか。苦手意識、恥じ意識、劣等感だけしか残らないのではないか。

そんな子には幅を広げて、逆上がりとマット、跳び箱を組み合わせればよいのではないか。課題は一人一人違ってよい。

そこまで考えて、2年目から打ち出した戦略が「逆から攻める」授業とそれを援助するTTであった。「逆から」とはまさに従来の教科書と指導書で教えるやり方の逆、教科書を頭から全部教え込むやり方の逆ということ。最後に出

てくる問題を一番最初に持ってくるのである。問題に取り組む子どもの助っ人になるのがTTにはかならない。

最初の年は6年の算数に限った。5学級に先生を7人つけた。」研究授業も1人が年間2回やることにした。

「校長は強引」と言われながら、学校は次第に変わって行った。専科教諭が加わり4年生以上をTTとする独自の方法も板についた。入江校長は「やSだけのことはやった」という満足感にひたりながら、この3月限りで5年間の戦いの職場を静かに去った。

## 新刊のご案内

### 「生きる力」を育てる新しい授業(全6巻)

編集代表 加藤幸次

- 1 「新しいパラダイム」による授業の創造
- 2 学習環境の創造
- 3 意欲を高める授業
- 4 豊かな個性を育む授業
- 5 多様化へ対応する授業
- 6 「生きる力」を育てる評価活動(近刊)

教育開発研究所 各2200円

「自己教育力」「新しい学力」「生きる力」などと言われる学力を育成するためには、今日、明らかに”新しい”授業が創造されなければならないはずである。現実の「授業」を変革しない限り、「生きる力」という言葉だけが、まさに流行し、やがて消え去っていくにちがいないのである。

今日、緊急を要している課題は、言葉や論議ではなく、実際に授業を創造することである。本シリーズがそのことに貢献できると確信している。

(まえがきより)



## 学期研究会のお知らせ

### 「総合学習の考え方・進め方」PartⅣ

1. 日時 平成10年5月23日(土)

10:00~16:00

2. 場所 上智大学 7号館14F  
大会議室

3. 内容

- ・実践事例研究 打瀬小他
- ・講演 国立教育研究所 高浦勝義室長  
上智大学 加藤幸次教授

4. 参加費 会員 1000円  
非会員 3000円

「総合学習」「カリキュラム編成」等に興味、関心をお持ちの方々をお誘い合わせの上、ご参加下さい。

## 会誌12号へのお願い

会誌6号で個性化教育ガイドブックを発行しましたが、5年が経過し情報としては、かなり古くなってきました。そこで、会員の皆様への新しい情報として、個性化教育ガイドブック第2集を発行しようと考えています。つきましては、全国の先進校(会員が所属する学校)に原稿の依頼が届きました場合には、ご協力をよろしくお願いします。

## 会員名簿刷新について

郵便番号7桁化に伴って、会員名簿の改訂を計画中です。Eメール等も掲載し内容を刷新する予定です。夏前までに連絡が届きますので、ご協力をお願いします。

## 会費納入のお願い

会費未納の方がいらっしゃいます。振込用紙が届きましたら忘れずに郵便局に足を運んで下さいませようをお願いいたします。

〈事務局への問い合わせ・連絡先〉

〒115-0044

東京都北区赤羽南1-16-2-504

03-3903-4780 庶務部長 佐久間茂和

全国個性化教育研究連盟会報 第45号

平成10年3月29日発行

編集責任者 事務局長 高浦勝義

編集 広報部 館岡茂樹